

〔3〕その他の学習による実践

(1) 取り組みと考え方

中学部では、主な研究領域を生活単元学習としているが、課題学習や作業学習等その他の教科や領域でも個々の実態や目標に応じた効果的な題材及び支援の工夫を試み、研究の考え方や授業づくりの観点を基本にして取り組んでいる。生徒によっては、パターン化した活動や見通しの持てる学習形態に、心の安定や楽しみを持つことができる場合もある。また、学習集団の規模を工夫したり、個別に対応する場面を作ったり、他校の生徒と触れ合う機会を多く取り入れたりすることによって、多様な人間関係の拡がりや課題への直接アプローチが期待できる。さまざまな学習場面で模索しながら取り組んだ授業づくり、特に題材選定について述べてみる。

(2) 実践事例

① 課題学習による実践

a 考え方

中学部では、生涯にわたって生活を楽しむための素地として、基礎学力と養護・訓練の両方の面から力をつけることが望ましいと考えている。それは、基礎学力の習得は理解力（読む・聞く力）と表現力（話す・書く力）を伸ばし、生活をより豊かでより合理的にすることができるからであり、養護・訓練はその基盤となる心身の障害の改善と克服を図ることができるからである。生徒一人ひとりがこの両面から取り組み、実際の生活の場面で生きて働く力となるには、個に応じた課題の選択や場の設定を工夫しなければならない。

そこで、次のような考え方にたって取り組んだ。

- ・1校時が始まる前の朝の活動に取り入れ、心身を活性化させる。
- ・継続が確かな力を育てるので、学習時間を毎日帯にとる。
- ・基礎学力の向上をめざした課題と養護・訓練的課題の両面から、個々の生徒が現在抱えている課題を最優先する。
- ・個々の生徒と現在つけたい力は何なのかを決め、生徒自身が自己の課題と目標を明確にする。そして、学習の方法を理解し、生徒が主体的に取り組めるように配慮する。
- ・生徒がやっていて楽しいと思えるような題材も入れる。
- ・個別学習を基本とするが、生徒の実態によってグループ学習をすることもある。
- ・学級担任が時間をかけて指導できるよう、水曜日の5校時にも時間を設定する。
- ・生徒の日常の生活との関わりや家庭との連携指導にも配慮する。

実践に当たっては、以下を留意事項とした。

- ・登校した生徒から自主的に取り組めるように、個に応じたプログラムを作る。
- ・国語、数学の基礎学力の習得は、個々の生徒の実態に応じてプリントやカード、パソコン、電卓等を使う。プリントは透明な引き出しケースに入れておき、自主的に取り組ませる。
- ・全身の筋力やバランスの強化をめざしたスクーターボードは、訓練のねらいと方法を個に応じたスタイルや回数を変えている。回数板で回数を確認しながら自主的に取り

組ませるが、正しい方法できているかを時々チェックし、訓練の効果を上げるようにする。

b 実践事例

「日記の直しをとおして、書きたいことをくわしく書く・表現を豊かにする実践」

H子は空想することが好きで、休憩時間などは鏡で自分の顔を見て自分に語りかけたり、人形を使って物語を作ったりしている。家庭学習の日記の中にも、現実でないことを本当のように書いたり、書く内容がTV、夕ごはん、おふろとパターン化していて、そこから脱しきれない状態でした。そこで、朝の課題学習の時間に、前日書いた日記の内容の中から1つだけ書きたいことを決め、そのことをくわしく書かせてみることにした。書く前には「○○のことだけです。」とか、「○○のことをくわしく書いてください。」と念押しが必要であるが、自分の書きたいことがくわしく表現されていることが多くなってきた。またこのことにより、1つの話題に順序性も出てくるようになり、話があちらこちらにとぶことも少なくなってきた。まだ担任の援助が必要であるが、自分の生活を見つめ直すことができ、物事を順序だてて考えることもできるようになってきた。また、空想したことを書くこともほとんど見られなくなった。

きょう、どんぐり会のピクニックでしたよ。おもしろかったです。かえるときに、「ダイエー」にも行きました。TV、夕ごはん、おふろ上がりは、かみをたたいてごしょごしょこすり、かみのけをたばねました。

家庭学習での日記

きのう、おおちだにこうえんで、えんそくをしました。うたとおどりとおひると、オリエンテーリングと「トンデカン」のおうたとおどりのげいをみてました。とってもよい一日でございました。本とうによかった。

課題学習で直した日記

表-12 課題学習における生徒の実態と指導計画

領域別の実態		Y 男	K 男	H 子	S 子	T 男	
養護・訓練	身体の健康		偏食		排泄の未自立		
	心理的適応		物への固執		場の認識困難		
	環境の認知		認知概念未形成	感覚の受容未熟			
	運動・動作	手・指の巧緻性未熟	筋力が弱い	手・指の巧緻性未熟	下肢の不安定	姿勢の保持未熟	
	意志の伝達		伝達能力未熟			応答のパターン化	
基礎学力	国語	言語・文字の習得	絵と言葉の対応ができる。	平かな8割程度の習得	筆圧が弱く、書いた文字が読みにくい。	小3程度の漢字の習得	小4程度の漢字の習得
		理解・表現	思いを日常会話で話すこともある。	発音不明瞭でささやくような声を出す。	話言葉と書き言葉を混同して使う。	簡単な文の読解ができる。	話がとぶ。理由を入れて説明ができる。
	数学	数・計算	1対1対応ができる。口まねで数唱する。	20までの加減法ができる。	20までの加法を数え足しでする。	100までの加減法ができる。	4位数までの加減法ができる。
		お金・時計	(把握困難)	時計の○時が読める。	時計の○時が読める。	千円までの金種が分かる。分針が読める。	分針が読める。お金の計算は不正確になる。
課題学習の内容	A (養護・訓練)	スクーターボードマラソン(3周)着替え手指活動(ねじ)	スクーターボードマラソン(5周)タイヤ引き切り絵	スクーターボードマラソン(5周)ひも結び	スクーターボードマラソン(5周)回転いす、吹き矢つま先立ち	スクーターボードマラソン(5周)ルームランナーなわとび	
	B (基礎学力)	なぞり書きなぞり絵文字カード	平かな日記計算	平かな(丁寧に)日記直し計算	漢字電卓での計算	計算ワープロ朗読	
家庭学習		日記(なぞり書き)紙ちぎり	日記平かな計算	日記平かな計算	日記漢字計算	日記漢字計算	

② 学級毎の取り組みによる実践

a 取り組みと考え方

生活単元学習は、年間題材配列表にも示すように大単元として設定しているものと、週4時間の学級ごとの生活単元学習として計画しているものがある。日常的には、この時間を学級生活と呼び、調理実習、製作、読書、性教育、同和教育などを取り入れている。個々の課題にスモールステップで取り組める、タイムリーに身近な題材を扱うことができる等のよい点があり、重要な学習となっている。4時間のうち2時間が土曜日に設定されていることや、行事にかかわる大単元に取り組んでいる時は、合同生活に振り替えられることが多い、などの事情から実質的な時間数は足り苦しいのが現状である。しかし、担任が個々の生徒に対して年間を通して課題に取り組むことができるという点では、課題学習と同様、個に応じた指導を効果的に行うことができた。また、学校生活の基盤となる学級集団の仲間づくりという点においても、重要な学習場面であるとしてとらえている。生徒の日常的、将来的な生活を見通して、基本的な技能や態度を積み上げて「生活を楽しむ子」に迫った実践を次に掲げる。

- ティーパーティーをしよう
- 「花と緑のフェスティバル」に参加しよう
- 水着や給食の白衣の洗濯・アイロンがけは自分たちでやろう。
- 学期末には、ズック・長靴を洗おう ○簡単な弁当作り
- お茶（飲み物）とお菓子の組み合わせ ○映画を見よう
- 友だちの家（先生の家）を訪問しよう ○雑巾を縫って自分たちで使おう

b 実践事例 「水着や給食の白衣の洗濯・アイロンがけは自分たちでやろう」

学校での汚れ物は、家に持ち帰って洗濯をし、また持ってくるというのが常だった。基本的な態度として、洗濯やアイロンがけは自分ですることになっているが、実際は母親がしていることがほとんどである。家族の物と一緒にさっとしてしまうほうが早いので、なかなか日常的な学習として家庭では定着しにくい。そこで学校で使った物はできるだけ学校で洗濯しようと考えた。

給食の白衣や水着、行事に使ったトレーナーやたすき等、学習や生活で使った物を自分達で洗濯するという取り組みを、生徒は自然に受け入れた。洗濯機の使い方、洗濯物の干し方、アイロンのかけ方等、回数を重ねるごとに要領を得ていく。定期的に必要な学習なので、生徒にとっても必然的で見通しが持ちやすい。学期末には、ズックや長靴も洗った。「珍しく自分で靴を洗っていました」という声が家庭から聞かれるようになった生徒もいる一方、「家からは何もしません」という生徒もいる。個に応じた意識づけの方法の検討



アイロンがけ

や定着度を図る手立ての工夫等、家庭と連携を取り進めていくことが必要である。

③ 作業学習による実践

中学部では、作業学習のねらいを次のように考えて取り組んでいる。

- (ア) 経験の拡大～浅く広く、いろいろなことをやってみて、いろいろな仕事があることを知る。(おもしろいもの、好きなことを見つける・生活とのつながりの中で、自然に体が動く)
- (イ) 作業態度の習得～仕事(作業)には時間や約束・決まりなどがあることを知って、守る。(制限された時間がある・集中して取り組む・作業内容や仕方についての決まり、やくそくを守る)
- (ウ) 場の区別～遊びと仕事の区別をする。(ふざけないで、けじめをつける)
- (エ) 意欲と自信の喚起～作業する(働く、製作する)ことの喜び、楽しさ、おもしろさを味わうことにより、意欲を高める。

1. 作品や収穫物の出来上がり、仕上がりに満足する(成就感)
2. 自分が使えたり、生活の中に生かしたりすることができる
3. 自分が作ったものを人にあげて、喜んでもらう
4. バザー等で収益をあげることで、労働と賃金の結びつきを知る機会になる

- (オ) 趣味の拡がり余暇利用につなげる。

「生活を楽しむ」についての視点では、次のような力を期待する。

- ◎一般社会人として、必要な場面で体を自然に動かすことができる。
- ◎自分でできる喜びや楽しみを知ることができる。
- ◎少しでも豊かな人生を送る(生活を楽しむ)ことができる。
- ◎人間性の基礎の確立をめざすことができる。

作業学習が好きな生徒は多く(P59参照)、時間毎にめあてを持って一生懸命取り組んでいる。生徒は3年間の作業学習の積み上げで着実に力をつけている。コース別作業・合同作業(はしいれ、ししゅう等)・校内作業実習・校外作業実習など、年間を通して実施している。

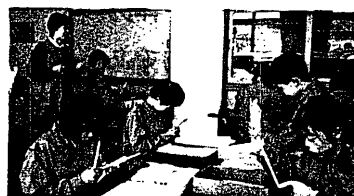
コース名	農耕・園芸	手工芸	陶芸
主な作業内容	季節の流れに合わせて野菜や花などを育てたり、収穫したりする。収穫した野菜などを調理したり、花を飾ったりする。バザーに出したり、学部の行事などで調理実習をしたりする。	木工、刺繍、はし入れ(軽作業)の3グループに分かれて活動する。生徒の興味関心と特性に合わせて、通年で一つ作業を行う。作品展やバザー出品する。はし入れは、できたら業者に納める。	成型、磨き、上薬かけの作業を中心に活動する。通年で、数回、繰り返す。自由作品やろくろによる製品等、幅広く作品作りを楽しむ。
合同作業	・オリエンテーション(4月) ・サツマイモの苗植え(5月) ・陶芸、木工など他の作業学習の体験	・椎茸のコマ植え(4月) ・サツマイモの収穫(10月)	・はし入れ(4月、随時) ・校外学習(作業班別)
作業実習	・校内作業実習(1学期)	・校外作業実習(2学期)	
バザー等	学習発表会の即売会	児童福祉展	ふれあい広場



農園



スウェーデンししゅう



合同はしいれ

④ 交流学习による実践

中学部は、県立鳥取養護学校（中学部組学級）、県立白兎養護学校（訪問学級）、市立湖東中学校（障害児学級）と交流している。お互いの存在を知って認め合い、友だちや学習の輪を拡げて生活をする意欲を高めていくことをねらっている。年間を通して計画を立て、普段の学習、プール、卓球、運動会、学習発表会、お楽しみ会、ふれあい広場等、各々学校の生徒の実態に応じて内容を工夫して交流を深めている。友だちだという意識を持っていて、何か行事や催しがあると、「〇〇の友だちを呼ぼう」とか、「△△さんは卓球がうまい」等交流校の生徒のことを話題に出す生徒もいる。また、各学校を訪問すること自体をとっても楽しみにしている生徒もいる。この交流を通して、新しい環境になじみにくい生徒も、場の雰囲気戸惑いながらも、少しずつその活動を受け入れられるようになった。校外に出る事を利用して、普段乗らないバス路線の時刻を調べたり、バス停で友だちや教師と待ち合わせたりする学習を取り入れている。

このようにして、交流学习は人・物・場面等の素材を豊かに含む学習であり、生徒の生活する力および生活を楽しむ力の両面を育てる学習である。人と人とのつながりを大切にしたい生徒自らが主体的に関わろうとする交流学习を今後も続けていきたい。

〔4〕行事等への参加

校外的な行事として、連合運動会、市中合同文化祭、中教振卓球大会等に参加している。市中合同文化祭と中教振卓球大会は中学生だけの行事なので、生徒の生活年齢をとらえさせられるよい機会である。同年代の多くの友だちの中になると、一人一人の生徒の姿や課題が浮き彫りになってくる。

市中合同文化祭は、同年代の中学生がどんなことに取り組んでいるのか、その成果を見ることががんばりを認めたり、自分と比べたりする力をつけてほしいと願って参加している。現段階では他校の生徒の発表を鑑賞する立場である。「僕たちもやりたい」という生徒の声はなかなか聞かれないが、他校の生徒の合唱を聴いた時、「みんなも大きな声がでるなあ」とか、太鼓の演技を見た時「みんなも負けとらんかもしれんなあ」などと声かけをすると、「うん、うん」とうなずく姿が見られた。

中教振卓球大会では、なかなか実力は及ばないものの一人ひとりが自分の力を発揮して他校の生徒と対戦する。「強いなあ」と自分が井の中の蛙であったことを知る生徒もいれば、本番で力を発揮しランク別で優勝するという生徒もあって、生徒たちの意欲と度胸が試される場でもある。勝敗に対して「競う」という経験をするとよい機会である。

最後に、学校としてではないが、「ふくべらっきょう花マラソン」に有志が参加している。10月下旬にあり、校内マラソンや大山登山等で生徒のスポーツへの関心も上向きの時期である。スポーツや体力づくりに向けて生徒を励まし、意欲を高めるとともに、保護者への啓発も一つの目的である。学校や学部の行事ではなく、あくまでも一市民としての参加である。積極的に生活を楽しもうとする姿勢を家庭にも持ってほしいという願いが基である。子どものやる気に押されて「よし、それなら」という家庭もあれば、子どもより保護者の方がやる気を持ってリードする家庭もある。保護者によって子どもが変わることが、